

アントレプレナー教育における「ことばの力」の変容

○高橋薫¹・村松浩幸^{2#}・金隆子^{3#}・金俊次^{4#}・村岡明^{5#}・椿本弥生⁶・堀田龍也^{7#}

(お茶の水女子大学大学院¹・信州大学²・米沢市立第二中学校³・米沢市立第四中学校⁴

(株) ジャストシステム⁵・東京大学⁶・玉川大学学術研究所⁷)

目的 2008年度版中学校学習指導要領では、すべての教科で言語力を育成することが指導目標として掲げられており、これまで以上に教師が言語力の伸張を意識して指導する必要性に迫られている。本稿では中学校の総合的な学習の時間にアントレプレナー教育(起業育成教育)に取り組んでいる山形県米沢市立南原中学校の一年間の実践(以下、当実践)を、「ことばの力」の変化に焦点を当てて報告する。当実践ではアントレプレナー教育の中に、学外のリソースを活用して作文の目的やリアルな読み手を意識させた文書作成活動を行うなど、言語力育成に配慮した授業デザインがなされている。本研究では1年間の活動の前後に生徒の意見文を収集し、作文の質と量の側面から書く力がどのように異なるかを明らかにする。

方法 対象 山形県米沢市立南原中学校の2年生41名(欠席者3名を除く)。

計画 時期(2水準)×レベル(3水準)の2要因計画で、時期は被験者内、レベルは被験者間の混合計画。

手続き 生徒は2008年5月にアントレプレナー教育の一環として知的財産権に関わる講義を受け、「コピー商品を販売している人を説得する」というテーマで意見文を書かせた。事前テストは2008年5月に、事後テストは同じテーマで2009年2月に実施した。得られた意見文は、作文の量については字数を、作文の質については意見文の全体的評価(5段階)と論証の型の評価を行った。論証の型の評価は主張・理由・データ・出典・反論の想定・反駁の6項目について、表れていれば1、表れていなければ0の2段階で評定した。また、事前テストの字数で上位・中位・下位の3群を設け、事前テストと事後テストの作文の量と質を比較した。

結果と考察 作文の量 各群の字数の変化を調べるために、2(時期:事前・事後)×3(レベル:上位・中位・下位)の分散分析を行ったところ、時期の主効果($F(1,38)=139.61, p<.001$)とレベルの主効果

($F(2,38)=38.72, p<.001$)が認められた。また、時期とレベルの交互作用が見られた($F(2,38)=11.40, p<.001$)ことから下位群ほど字数が増えていることが確認された。

作文の質 全体的評価の変化を調べるために、2(時期)×3(レベル)の分散分析を行ったところ、時期の主効果($F(1,38)=118.60, p<.001$)とレベルの主効果($F(2,38)=14.88, p<.001$)が認められた。また、時期とレベルの交互作用が見られたことから($F(2,38)=7.99, p<.01$)、下位群ほど作文の質が向上していることが分かった。さらに、論証の型の評価について項目ごとにWilcoxonの順位和検定を行ったところ、事前テストと事後テストの間に、主張を除く、理由($Z=-2.24, p<.05$)、データ($Z=-4.90, p<.001$)、出典($Z=-4.58, p<.001$)、反論の想定($Z=-4.02, p<.001$)、反駁($Z=-4.02, p<.001$)の5項目で有意差が確認された。以上のことから、生徒は産出する意見文の質を向上させ、より高度な論証をおこなっていることが明らかになった。これらの結果は、言語力育成に配慮した授業デザインの効果によるものと推察される。

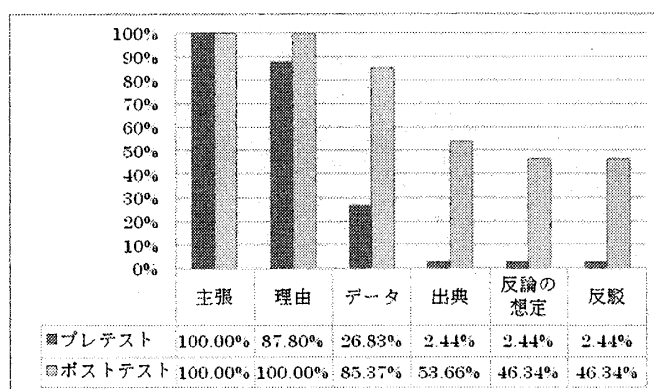


Figure 1 論証の型の下位項目の出現率

謝辞 本研究にご協力いただいた山形県米沢市立南原中学校の先生方、生徒の皆さんに深く感謝申し上げます。**付記** 本研究は財団法人博報児童教育振興会第3回(2008年度)「ことばと教育」研究助成の支援を受けて実施した。